

益子町ランドスケープ計画推進委員会

令和4年度 第1回会議 会議録

1、日時：令和4年10月28日（金） 16：00～17：15

2、場所：益子町役場 大会議室

3、出席者

広田 茂十郎	町長
加藤 義勝	委員長
鈴木 信義	副委員長
横山 茂夫	委員
大岡 周久	委員
中山 達美	委員
小玉 貴浩	委員
藤原 愛	委員

(事務局)

産業建設部長	池田 浩之
建設課長	鮎沢 義則
建設課	矢島 剛
同上	小林 大輝

ランドスケープむら	徳永 哲
芝浦工業大学准教授	小埜 芳秀

4、議題

(1) 益子町ランドスケープ計画について

- ①これまでの振り返り
- ②事例紹介
- ③ランドスケープワークショップの目的について
- ④ランドスケープワークショップの進め方について
- ⑤R4年度(3地域)、R5年度(4地域)の開催地域について

(2) 意見交換

5、議事概要

1 開会

2 町長あいさつ

【町長】

益子町には、川沿いに広がる田んぼや里山などの自然景観がある。また、古代には窯も築かれ、107 個の指定文化財やましこ世間遺産を含む文化的景観、多くの民家、長屋、石倉、ベーハ小屋といった建築物の景観等が多くあるが、どれを取っても、益子ならではの景観であり、将来の町共通の貴重な資産である。

こうした景観を 50 年後、100 年後も保全するために、益子町では、令和 2 年に「益子町ランドスケープ計画」を策定し、この計画を推進している。

今後も、将来の益子町の景観について、住民と行政が一体となり、この「益子の風景」を活かしたまちづくりを進めていきたい。さらに滞在観光にもつなげ、地域経済の活性化や益子の新しい楽しみ方も提案していく。

皆様には、各分野で培われた貴重で豊富な体験や知識を活かした意見をいただきたい。よろしくお願ひしたい。

3 会議事項

①これまでの振り返り

【小埜】

これまでの経過を簡単に説明する。

2020 年 3 月にランドスケープの冊子をまとめた。また、ワークショップを地区ごとに進め、歴史的な建造物、農業景観など、思い出に残るものを地図にマーキングをした。

昨年度は、7 地区で大学生の参加を募り、ワークショップを開催した。

小宅地区では、「小宅の田んぼの風景をどうするのか」、「小宅小学校を今後どのように活用していくか」などを踏まえ、小宅全体の風景について、小学生、大学生、地元の方を含め、話し合いの場を作った。

七井地区では、アカマツの再生計画を益子町で行っているため、七井中学校や北運動場の周辺にアカマツを使いながら、益子の風景を再生できないか等を益子里山の会の方々と話し合いをした。

益子西地区では、琴平池周辺の意見交換をして、フィールドワークを行った。

益子地区では、円道寺池周辺の散策や円道寺池周辺で活動している花の会と話し合いをし、大学生による製作なども行った。

田野地区、一部益子地区生田目では、田野地区又は一部山本地区と重なりがある前沢町有

林で大学生と一緒に山歩きをしながら、山の風景、町有林の風景を今後どのように守って、整備して、活用していくかの話し合いをした。

大羽地区では、「雨巻山のアクセスに対してどのような方法があるか」の話し合いをした。

山本地区では、ベーハ小屋を一つの益子の素晴らしい風景と捉え、大学生とともに活用方法や保存方法などを地域の方々の協力のもと調査や計画などを進めた。

昨年度は、2019 年度につくったベースをもとに少しでも具体的に話が進むよう、地域で活動されている方々の協力を受け、全体計画の一部から何かを進めようということを中心とした1年であった。

今年度からは徳永先生の指揮のもと、地域の方々、役場、専門家それぞれの立場から意見を聞き、具体的に何かを進めるための工程に入っていきたい。

②事例紹介 —ランドスケープを生かした地域づくり—

③ランドスケープワークショップの目的について

【徳永】

・五島列島の久賀島：写真では中学生が詠んだ句を地元の人が表示させている。地元の方の見方や考え方が来訪者にわかると素晴らしい風景ということがわかる。住んでいる方々の目線と来訪者の目線の両方から見ていくということが重要である。ランドスケープをまちづくりの後押しをする材料として捉えていくと、自分たちの住んでいる地域を故郷として実感しやすくなる。

・北海道の小樽市：昭和 50 年頃に運河を埋め立てて道路にする計画に対して、市民による保存運動が起きて、運河の幅の半分の埋め立てで決着した。残った風景が、観光の対象になり、観光客向けのホテルができたり、お店ができてきたりして新たな風景が出現した。価値観の違いにより、町が活性化してよかったと思う人もいれば、懐かしい風景が消えてしまったことで残念がる人もいる。

・熊本県の五木村：50 年近く前、大雨で球磨川流域に災害が続いた。そのため、国は洪水調整用のダムを作る計画を立てた。村の中心部は移転を余儀なくされるため、移転先の代替地の風景づくりをどうするかということになった。基盤整備の造成の仕方が決まっていたが、それまでの村の風景とかけ離れた計画だったので、その見直しから検討を進めた。村に残る茶畑、木造の小学校など、思い出に残るものを地元の方々と話し合った。当時の建設省に、村の意見を伝えることができ、5 年後には計画の見直しを図れることになった。その後の造成工事において、石積みの素材や道路際の隙間の植栽スペースの確保など、詳細デザインの調整を行った。土木の専門家と協議を重ね、粘って協議を重ねていくことで、認められ、住民が思い思いに植栽ができるスペースができた。

このような経過を経て、新しい造成地にもせせらぎの水路を作ったり、ごみステーション

を木造にしてみたり、茅葺の家屋を移築したりなどができるようになった。

・イギリス：湖水地方は美しい農村風景を歩いて楽しむ観光地で、パブリックフットパスというものがある。大型バスが入れないような農村地域が広域に広がっていて、歩いてめぐって行く中で、ゲストハウス（小さな宿泊施設）や農家レストランなどがある。1990年ごろからこのような観光のスタイルが広まり、農業とともにこのツーリズムが産業の支えに重要な役割になっている。車の中から見るだけではわからない、歩くことで、その土地の風土や風景に触れることができることを売りにしている。

・南米のペルー：マチュピチュ遺跡が有名だが、マチュピチュ遺跡周辺地域は観光振興という面では失敗と言われている。外資系のホテルやお店はたくさんあるが、地元企業による経営が少なく、地元の人の雇用も多くはないそうである。そのため、地元にお金が落ちない。

その反省を踏まえて、ペルーの北部にあるクエラップ遺跡周辺地域は、今後世界遺産にしていき、地域主体の運営による観光の新しいモデルを作っていこうとしている。インカ時代からの遺跡があり、現在も地域の素材を用いた家屋等が使われている。紙工芸、地元の郷土料理、木材を使った伝統技術、子供たちの遊び等も、この地域の文化的資源の一部として、ペルーの文化省などから認められている。また、新しい文化遺産観光の事業を進めていくために、地域住民主体の協議会が設立された。このように、これまで脚光を浴びていなかった地域でも、ランドスケープを生かした取り組みを進めていくことで、注目が広がっていく。

・熊本県の黒川温泉：黒川温泉地区は約100世帯が住んでいる一つの集落である。ここは年間90万人ぐらいの入込客数で推移している。1980年代までは、観光のデータも取れないくらい来訪者がいない地域であったが、1990年頃から「黒川一旅館」ということで、集落全体が一つの旅館で道は廊下、という考え方が集落の自治会で共有された。2001年頃からは、街並み環境整備事業という国の補助を入れて公共空間の景観整備をした。

街並み事業の前までは、景観整備に使うお金もなかったので、地元の方々が山の木を取ってきて、旅館街に植えたりした。それが心地よい雑木林になり雰囲気が出た。この緑化による雰囲気作りと入湯手形という露天風呂を巡ることができる案内システムがうまく溶け合い、だんだんと人気が出てきた。

入湯手形は、老人会に委託して作ってもらい、老人会にお金が残る仕方が今も続いている。年間11万枚売れる時があったので、老人会もやりがいをもって取り組むことができた。

使いにくかった生活道路を修復したり、乱立していた看板を整理したりして、景観に合うように変えていった。ルール化することでまちづくり協定を作っていった。

黒川温泉では、旅館街を中心に街並み整備を進めてきたが、2010年頃からは、イギリスの湖水地方のように、山の森やや草原のほうまで歩いて観光してもらえるよう、「野みちをゆく」というフットパスの整備活用に取り組んでいる。ウォーキングルートを作って、その

マップや案内サインも用意している。集落内の取り組みを、だんだんと若い世代が担っていくことになったので、これまで取り組んできた考え方を「ふるさと憲章」としてまとめ、次世代につないでいくように努力されている。

・熊本県の南小国町：管理の手が回らずに茂った杉の山林を、主要道路の沿道だけでもしっかり整備しようということで、林野庁の補助を受けて整備をした。また、農村の風景を活かしたツーリズムについて、若手の人が知恵を出して、SNSで発信したり、農家と連携をしたりして、工夫をしてきている。

・福島県の富岡町：第1原発がすぐ隣にある町だが、地元の有志達が自然回復のための話し合いをし、自然を生かして、町を再生していきたいという考えになった。そのため、復興まちづくりに向けた提案書を住民の方々が作った。ここでの取り組みの一つとして、ワイン用のブドウの木を海岸沿いに植えて、将来的にはワイン用ブドウの産地にできないかということを進めている。

・岩手県の陸前高田市：大きな津波の被害からかさ上げ造成整備された市街地を再生（活性化）させるために、ランドスケープの力で何とか心地よい雰囲気を作れないかということになった。造成された新市街地を緑化するには復興交付金は使えないということで、地元の若手有志達が手作りで緑化に取り組んでいる。黒川温泉の事例を参考にしながら、手づくりの緑による風景づくりを進めている。

これまでをまとめると、大きなお金を使わなくても、ランドスケープの価値に基づいた地域の活性化は、いろいろな取り組み方や可能性があることがわかる。地域の持ち味を生かして、将来の世代に繋いでいくことが大切である。その大きなチャンスの時期が益子町も迎えているのではないか。事例紹介としては以上である。

④ランドスケープワークショップの進め方について

【徳永】

一地域当たり3回のワークショップを考えている。今回は益子西地区のワークショップを行った。

第1回のテーマは「歩いて語る」である。ランドスケープ計画の事例紹介を踏まえて、現地を歩いて課題個所について語っていただく。

第2回のテーマは「語って描く」である。私たち作業チームからの「たたき台」案に対して、課題解決への視点から意見・アイデアを出し合い、将来方向を描いていただく。

第3回のテーマは「描いてまとめる」である。作業チームからの加筆修正案に対して、維持管理面からの意見・アイデアを出し合い、持続可能な環境管理と整備の基本計画をまとめ

ていただく。

⑤R4年度(3地域)、R5年度(4地域)の開催地域について

【事務局】

7地区のうち益子西地区をモデル地区として、今年はあと2地区を実施する。残り4地域は来年4月から翌年の3月にかけて1年に3回、ワークショップを開催する。

【A委員】

先ほどの黒川温泉の事例は大変すばらしいと思う。黒川温泉事業には地元の強力なリーダーや大学の先生などは関わっていたのか。

【徳永】

黒川温泉の事例でのリーダーは、1990年頃に青年部を構成していた7～8名の人たち。最近ではその子供さんたちが青年部を構成しており、新たな取り組みに挑戦している。そのため、代表して名前が挙がるような突出したリーダーがいたわけではない。例えば先に人気が出ていた湯布院温泉では、1970年頃を中心に尽力された有名な3名のリーダーがいた。しかし、黒川温泉は一つの集落として「みんなで協力してやっていく」雰囲気を進めていった。その中に、緑化は誰が得意、イベント企画は誰が得意、調整ごとは誰が得意、といったように、テーマごとのリーダーがいて、全体を引っ張っていった感じである。

(2)意見交換

【副委員長】

益子の円道寺池の整備を始めて10年経つが、整備の目的は、観光客が城内坂の焼き物の買い物や見学をしていく中で、それだけではなく、自然も楽しんでもほしいという目的で始めた。また、大塚実さんからも「自然があるのだから活かした方が良い。」と言われ、桜の木をいただき、始めたのが益子の花の会である。遊歩道も里山を観光できるように整備をした。その結果、イノシシが出ないようになった。ただ、花の会で話し合いをしていく中で、これでいいのかと思う時もある。今までみんなと進めてきたが、今後、専門家を入れていかないといけないのかを考えている。ランドスケープ委員会や里山の会で何かアドバイスがあると助かる。

【B委員】

去年から私は参加していて、これが2回目である。そのため、ランドスケープ計画の詳細や流れがわからなく、自分でどのように整理すればいいかわからない。ランドスケープ計画は全体的に進めるのか、各々の地区でそれぞれ進めるのか、または自分の地区だけをやっていけばいいのかわからない。小宅地区では今年、環境保全会を立ち上げて活動をしている。

亀岡八幡宮の古墳群も整備をされていて、そこから見る田園風景が良いという観光客がいる。古墳群から見る田園風景を古墳群のグループと保全会のグループをうまくマッチさせると、もっと良くなると考えている。小宅地区は古墳群を中心にまとまりが出てきて、これからもっといい方向に行くのではないかと思っている。

【C 委員】

上山森林保全会があって、上山地区だけであればいろいろ進めていけるが、田野地区には長堤や東田井もある。そのため、どういう形でまとめればいいのか分からない。上山地区だけではなく、長堤地区などまで広げていろいろやっていきたい。

【D 委員】

ランドスケープについてよく理解はしていないが、山本地区では以前、ふれあいの里づくりで色々な環境整備をしてきた。山歩きやウォーキングが好きな方が多いので、地元の有志達によって遊歩道を整備している。何らかの形でもう少し良くなるような活動ができればいいのかなと思っている。小埜先生と一緒にベーハ小屋を歩いたりしながら、大学生たちが考えたサイクリングの休憩所や自転車置き場などの発表を参考にして、色々やっていきたい。まず、自分らの地区で色々取り組んで、それから他の地区を増やしていくという考え方でいいのかなと思う。それが良い事例になれば参考にしていく形でいいと自分は理解している。

【E 委員】

各地区の代表がそれぞれの地区で色々進めて、それが少しずつ全体に広がっていったらいいと思っている。大きくというよりも少しずつ意識が高まっていけたらと思う。

【町長】

景観 10 年、風景 100 年、風土 1000 年、益子には里山があって、自然があって、その中に焼き物、農業などがある。これらは今まで先祖たちが培ってきた中でできた風土だと思う。ランドスケープの考え方の一つには、地域の合意を得て進めることが重要だと考える。今の環境を守り、どう発展させるかが我々の役目である。

山本地区では平成 10 年、11 年に景観ワークショップを行った。また、山本地区の地域点検、土地の利用点検、人材点検も行った。なぜ行ったかという、むらづくりは今まで行政主導であったが、栃木県のむらづくりが地域住民の合意形成により、むらづくりを行う方向性のもと、山本地区をたたき台として行った。それが平成 13 年にむらづくり事業として県の事業になった。当時 7,000 万円の事業費だが、平成 13 年にワークショップをして地域課題を話し合った。地域住民の中で話し合いをして、風土を考えていくという視点が重要なことだと思う。

また、子供たちの参加もあったほうがいいと思っている。益子町の地区別戦略は、地域でワークショップ等を行い、地域課題を解決しながら、コミュニティのあり方も考えていくということで進めている。ランドスケープも同様である。地域の問題を住民と行政が一緒になって考えながら、問題解決に向けて楽しくやっていきたい。

4 閉会